

今日の箇所は、死よりよみがえられた主イエスが、二人の弟子たちに出会われた、というところです。主の十字架の死後、三日目の出来事です。主イエスの復活は、初めて聞く人には実に信じがたいことだと思います。そのために「弟子たちは夢の中で主にお会いした」とか、「あまりの悲しみのゆえに彼らは妄想を見た」といって疑う人もおられるかも知れません。でも主は、本当によみがえられたのです。そして、私たち信仰者は、そのことを心から信じています。今日はイースターですから、この主の復活について特に見ていきます。

13-14 節「ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。14 そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた」。このふたりの弟子とは、主を裏切ったユダを除く、十一弟子とは別の弟子たちのようです。18 節にあるように、その一人の名は「クレオパ」といい、もう一人は、おそらく彼の妻であったらうと言われていています。彼らは、この時、エルサレムからエマオという村（おそらく、そこに彼らの家があった？）に向かう道中にありました。

そこによみがえられた主が、近づいて来られ、彼らに話しかけられるわけですが、主は、彼らにこう聞かれるのです。17 節「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか」。するとふたりは暗い顔つきになり、そこに立ち止まり、クレオパが答えます。18 節「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか」。そして、その出来事についての説明が続きます。

19-24 節「イエスが、『どんな事ですか』と聞かれると、ふたりは答えた。『ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。20 それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。21 しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、22 また仲間の女たちが私たちに驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみましたが、23 イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。』」。

彼らが道中、話し合ったり、論じ合ったりしていたこと、それは主イエスのことについてでした。主の十字架と復活について彼らは論じ合っていたのです。そこに当の本人が現れ、彼らに話しかけられたわけですが、彼らの目は「さえぎられていて、イエスだとはわからなかった」と16 節にあります。なぜクレオパともう一人は、それが主だとわからなかったのでしょうか？彼らは、主の顔を見たことがなかったのですか？十字架の前と後では、主のお姿があまりに違っていたので、それが主だとはわからなかったのでしょうか？

どうぞ想像してみてください。この時、彼らは、主イエスのよみがえりを信じていたと思いますか？彼ら自身、直接、復活された主にお会いしていなくても、彼らのいうように仲間の証言から、また聖書から、彼らは主のよみがえりを信じていたのでしょうか？その答えは、この後に続く、彼らに対する主のことばからわかります。25-26 節「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光に入るはずではなかったのですか」。

この時点で、クレオパともう一人は、主のよみがえりを信じていませんでした。いや、彼らにはそのことがわからなかった、といった方が良くも知れません。ですから、少なくとも彼らは、よみがえられた主を宣べ伝えるために、エマオに向かったのではないと結論付けることができるでしょう。ではなぜ、彼らは主のよみがえりを信じていなかったのでしょうか？

主のおことばからすると、彼らが当然そのことを信じるべきだと主は期待しておられるように聞こえます。でなければ、彼らに向かって「愚かな人たち」「心の鈍い人たち」と言われることはなかったことでしょう。では、なぜ彼らはそれを信じるに至らなかったのか？彼らはなぜ、仲間の女性たちの「御使いたちがイエスは生きておられると告げた」という言葉を信じなかったのですか？また墓に行き、「イエスさまは見当たらなかった」という仲間の証言を聞いても、主のおことばを思い出し、信じるに至らなかったのでしょうか？

それは「死者の復活」が、それほど信じ難いものだからです。弟子たちは、主ご自身の復活の前に、主がラザロをよみがえらされたのを経験しました。それでも彼らには、主ご自身のよみがえりを信じる信仰はありませんでした。そして、それは現代に生きる私たちも同様だと思うのです。主イエス・キリストのよみがえりとは、そういうものではないでしょうか。

でも、それだからこそ、主が弟子たちにされたことがあります。それは、ご自分の方から彼らに現れて下さることです。つまり、この時も、主はご自分の方から、クレオパともう一人に現れて下さいました。そして、聖書からご自分について語られていることを説き明かすことで、主はご自身を証されたのです。27節に書かれてある通りです。「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」。

主イエスは、ご自分に気づかないクレオパたちに、「わたしだ。イエスだ。わたしはよみがえったのだ。ほら、からだにさわって確かめて見なさい」とは言われませんでした。代わりに、モーセおよびすべての預言者、つまり、旧約聖書全体から、ご自分のことを説き明かされたのです。神様が、来るべきメシヤについて聖書を通してあらかじめ語っておられたのは、実にこのことのためです。つまり、主イエスは、ご自分の十字架の死と復活を預言の成就として説き明かされました。

では、どうですか？主から直接みことばを聞いたクレオパたちは、それで主のことがわかりましたか？いいえ。それは、もう少し後のことです。28-31節「彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。29 それで、彼らが、『いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから』と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中に入られた。30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった」。

もしこの時、彼らが無理に願って主をとどめることがなかったら、どうなっていたと思いますか？それでも彼らの目は開かれ、それが復活の主だとわかったのでしょうか？私はそうは思いません。もし彼らが「いっしょに泊まって下さい」と無理に願うことがなければ、おそらく主はそのまま先に行かれたことでしょう。そうすれば、彼らの目も開かれることはなかったと思うのです。

でも、クレオパたちは、「いっしょに泊まって下さい」「自分たちとステイして下さい」と無理に願いました。主はそんな彼らの願いを聞かれる、そしてその後、彼の目を開かれたのです。つまり、主は彼らにご自分のことをわからせて下さいました。主イエスは、聖書とご自分のことばを信じない弟子たち、それゆえに、主の復活を信じない彼らに、ご自分の方から近づかれました。彼らの不信仰を責めつつも、でも、主はご自分がよみがえられたことを彼らが信じるため、そして、彼らが変わられるために現れて下さったのです。

でも、そのお姿を見、また聖書から説き明かしを聞いても、「それが主である」とわからなかったのが、このクレオパたちです。それは彼らの目がさえぎられていたからですが、では、そのようにさえぎられている目は、どうしたら開かれるのでしょうか？つまり、どうしたら私たちの目（心の目）は開かれて、主イエスが死からよみがえられたことを本当の意味で知ることができるのでしょうか？

すでに見たように、クレオパたちは、自分たちと話をしているのが主であるとは知らずに、聖書からキリストについての説き明かしを受けた後、主に「自分たちといっしょに泊まって下さい」と無理に願いました。それは、この主との出会いとまた聖書の説き明かしを通して、彼らの心がうちに燃えていたからです。彼らは、目が開かれ、それが主だとわかった後にこう語っています。32節「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか」。

主との出会いと聖書を通してキリスト（救い主）について聞くことは、本来、私たちの心を燃やすものです。なぜだかわかりますか？主イエスが神であられる方だからです。主は、この天地万物を創造された方、その万物の存在の理由であり、また治めておられる方です。そんな方が、人となってこの世に来て下さった。

それは私たちが、自分ではどうすることもできない罪と死の問題を解決して下さるためです。主イエスの十字架の死、それはご自身の罪が原因ではありません。ユダヤの指導者たち、ローマ総督ポンテオ・ピラトの力が、主に優ったからでもありません。主はご自分から、私たちの罪を負うことで、私たちに対する神のさばきを身代わりとして受けて死んで下さったのです。それが、主が十字架で死なれた理由です。彼の身代わりの死、その代価によって私たちが赦され、私たちのいのちが贖われるためです。

でも、もし主が死んだままであったのなら、そこにどうやって復活の希望、天国への望みがもたらされますか？よみがえられた主が、復活信仰をもたない弟子たちに現れて下さることがなければ、それでも彼らは「ほんとうに主はよみがえられた」と命をかけて、主の福音を宣べ伝えたいと思いますか？この世の罪、死の問題を超える復活と天国の望みなしに、信仰の先人たちは、どうやってありとあらゆる激しい迫害の中を耐え忍んだのでしょうか？

皆さん、あなたは聖書を通してこのキリスト（神の救い主）が語られる時、あなたの心はうちに燃えますか？神であられる方が人となり、あなたのため、自分ではわかっているつもり、でも何にもわかっていない自己中心なあなたのために、十字架の苦しみを耐え忍ばれたこと、そして、大きな叫び声をもってその贖いの死を成し遂げて下さったことを聞いて、あなたの心は熱くなりますか？

主がクレオパタチに近づかれた時、彼らには主のよみがえりが本当かどうかはわかりませんでした。でも、主とお出合いした時、聖書を通して主がご自身について説き明かされた時、彼らは心に何か燃えるものを感じたのです。それゆえに、主がそのまま行ってしまわれるのをよしとは思わなかった。無理にでも、自分たちといっしょにステイしてくれるよう、主を引き留めずにはおられません。そして、主はそんな彼らの願いを聞いて下さった。そのようにしてご自分を求める者に、主はご自身のことをわからせて下さったのです。彼らの目を主が開いて下さることによってです。

33-35 節「すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、34 『ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現された』』とっていた。35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した」。主のよみがえりは「わかれ」とって人間の常識に訴えかけて、わかるものではありません。まず主の福音が語られなければいけません。そして、主ご自身が、主を呼び求める者の目を開いて下さる必要があるのです。

でも、主の御心は、私たちにご自身を現すことです。そのためにこそ、ご自分の方から弟子たちに現れて下さいました。彼らを通してご自分が証されるためです。そうであるならば、クレオパタチのように無理に願う者、主ご自身を切に求める者に、主がご自身を現して下さらないわけがあるのでしょうか？問題は、主の方ではありません。聖書のすべてを信じない不信仰な私たち、神様を小さくし、でも自分自身は大きくする高慢な私たちに問題があるのです。でも、その問題を認めて、そんな者を救って下さるお方を知ろうと切に求めるなら、主はあなたの目を開き、ご自分がよみがえられ、今も生きておられることをわからせて下さいます。そして、「ほんとうに主はよみがえられた！」とあなたにも言わせて下さるのです。